

園番号 615

令和元年度 奈良市立富雄北幼稚園 研究実践概要

園長名 香川 幸美
全園児数 39 名

1. 研究主題

友達と一緒にやり遂げる子どもをめざして
— 環境の工夫と保育者の役割 —

2. 研究年度 2年度

3. 研究主題設定理由

初めての事に躊躇し、うまくできないと不安に思う子どもも多く、なかなか挑戦できなかつたり、途中で諦めたりする。そこで、一人では難しいけれど、友達と一緒にならできるのではないかと考え、友達とかかわりながら、最後まで諦めずにやり遂げる子どもたちを育てていきたい。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

子どもが意欲的に遊びを展開し、取り組む中で達成感や喜びを味わい、心を動かす体験をすることが、やり遂げる姿にもつながるのではないかと考えた。また、やり遂げた結果だけでなく、やり遂げようとする姿につながる様々な経験を積み重ねていくための環境の構成や保育者の役割が必要かを探る。

②研究の重点

- 子どもがやり遂げようとする姿につながるための、環境の工夫や保育者の役割を、保育者間で探る。

③活動の方法

○ねらい 環境の工夫・保育者の援助 やり遂げる子どもにつながる姿 子どもの育ち

【事例1】

「大きなシャボン玉をつくるには」～友達に姿に刺激を受ける～ 5歳児 6月中旬

- 友達の動きを見たり、して、大きなシャボン玉をつくらうとする。
- 大きなシャボン玉をつくるための方法を自分なりに工夫して試す。

シャボン玉遊びのコーナーにうちわの骨や、筒、モールを巻いた針金などの道具を用意しておいた。 A児はモールを巻いた直径30センチほどの大きな針金を使ってシャボン玉遊びをしていた。A児は手の振り方や膝の曲げ方など全身をうまく使いながら大きなシャボン玉をつくり保育者や周りの子どもに「ほら！大きなシャボン玉ができたよ」と嬉しそうに知らせていた。その様子を見ていたB児が同じように大きなシャボン玉をつ



くってみようとするがなかなかうまくいかない。「A君みたいに大きなシャボン玉が作りた
いけど、すぐ割れてしまうねん」とB児が残念そうに言い、諦めようとしていた。そこで、
「Aくんはどんな風にシャボン玉をつくってるかな」と保育者が声をかけると、A児の様子
をじっくりと見たり、「ゆっくり下から上にあげるといいよ」とA児にコツを教えてもらったり
して、何度も挑戦していた。すると、「先生できた〜！」と満面の笑みで知らせに来てくれ
た。また、コツをつかむと、くるっと回ってシャボン玉を膨らませ、自分なりに工夫して膨
らませる方法を探していた。

(反省・評価)

保育者が、子どもの行動を言葉にして意識できるようにし、“仮説→実験→検証”を繰り返す
中で子どもの気付きや驚き、喜びを促すことができた。B児が諦めそうになった時に、保育者が
B児の不安な気持ちを受け止め、後押しとなるような声をかけた。それにより、B児は友達がシ
ャボン玉をつくる様子を見たり、教えてもらったりし、自分たちでできた喜びが遊びの満足感を
向上させた。

【事例2】

「緑のバッタと茶色のバッタ」～疑問をみんなで考える～ 4歳児 7月中旬

- バッタの色について疑問に思ったことや自分が考えたことを、出し合う。
- みんなで考えたり調べたりする面白さや楽しさを感じる。

ある金曜日、園庭でショウリョウバッタを3匹捕まえ、虫かごに入れていた。捕まえたショウ
リョウバッタを見ていると、A児が「色が違う」と言い、周りの子どもも「ほんまや。緑と茶色
がいてる」と、色の違いを話し始めた。「何で色が違うんやろう」と疑問に思った子どもたちは、
遊んだ後、クラスみんなで考えてみることにした。みんなで「緑と茶色やな」「何でやろう？」
と虫かごを覗き込んだ。色の違いを考えてみると、オスとメスで違う・大人と子どもで違う・緑
は葉っぱみたいで茶色は木みたい・バッタの種類が違う・色違い、という意見が出てきた。その
中で「調べたらいいやん」「本に載ってるかも」「ほし組さん(5歳児)なら知ってるかも」とな
り、保育室にあったバッタが載っている本を見てみたが、色の違いについては書かれていなかった。
「家に図鑑あるから見てくる」「お兄ちゃん、虫に詳しいから聞いてくる」「ぼくも」「わたし
も」となり、この日は答えはわからなかったが、家でそれぞれ調べたり聞いたりしてくるこ
とになった。

週が明け、登園してくると、B児が家からバッタが載った図鑑を持ってきた。それには色の違
いが載っていなかったが、「バッタ載ってるな」と、数人で覗き込んでいた。その後、みんなで聞
いてきたこと、調べたこと、考えたことを出し合う時間を持った。「おうちの人に聞いたけど『わ
からへん』って言った」「家の図鑑には載ってなかった」といろいろな意見が出る中で、B児が



「仲間がいないと緑で、仲間がいたら茶色ってお母さんが言った」と
言い、新しい意見が出てきた。それを聞き、みんなは「そうかも」
「そうなのかな」と考え出した。そこで、保育者はバッタの本を取り
出し、色の違いが載ってるページを見せた。そこには孤独相(緑)
群生相(茶色)の説明が載っており、保育者が読んでみると、ある
子が「一人でいたら緑で、いっぱいいたら茶色やねんな」と、答え
を見つけることができ、喜ぶ姿があった。

(反省・評価)

捕まえたショウリョウバッタの色が違うという一人の気付きから、クラスみんなの話し合いになった。話し合いを始めたときは、保育者を含め誰も色の違いがわからなかったことで、いろいろな意見が出てきた。調べる方法も考え、答えを見つけるまでの過程も楽しんでいった。疑問に思ったこと、不思議に思ったことをそのままにせず、みんなで考えていったことで、いろいろな意見に触れることができ、追究していく面白さを感じるきっかけとなった。子どもの興味関心の動向を考え、保育者が図鑑を出すタイミングが大切だと思った。

【事例3】

「明日もケーキ屋さんやりたい」

～目標に向かって、友達や先生と思いやイメージを出し合う～ 全園児 9月～10月

- 友達と一緒にケーキ屋さんに必要な物を考えてつくることを楽しむ。(5歳児)
- 5歳児の遊びに興味を持ち、自分たちもやってみようとする。(4歳児)
- ケーキ屋さんやお客さんになってやりとりをすることを楽しむ。(全園児)

お家ごっこの中で、友達の誕生日を祝おうとケーキ作りを始めた5歳児。ケーキができ上がると、今度は「ケーキ屋さんにしよう」とケーキ屋さんごっこが始まった。「次はどんなケーキをつくる?」「私はチョコケーキが好き」「モンブランもあるよね」とイメージをどんどん膨らませていた。保育者は子ども達のイメージに合う材料を一緒に探しに行った。そこで子どもたちは、様々な材料を見ながら「これ、モンブランに使いそうじゃない?」「これ、クリームみたい」と、ケーキづくりに必要な材料を探し、つくり始めた。遊びの後の話し合いで、ケーキ屋さんには「レジがあるで」「買うためにお金もいるよな」「看板もあつたらいいんじゃない」と色々なアイデアが出てきて、次の日から、ケーキ屋さんに必要な物をつくり始めた。ケーキ屋さんがオープンし、しばらくの間はクラスで売り買いを楽しんでいたが、しばらくするとお客さんが来なくなった。そこでみんなでどうすればいいか話し合ったところ、「うさぎぐみさんにも買いにきてもらったらいいやん」「廊下でしたら、うさぎ組に気が付いてもらえるんじゃない」と4歳児に声をかけることとなった。4歳児は何度も買いに来てくれたり一緒にお店の人になったりし、5歳児はケーキ屋さんが毎日大繁盛するのでとても嬉しそうにしていた。

運動会が終わり、4歳児は5歳児がしていることに興味を持つようになってきた。ある日、5歳児の保育室を覗いたA児が「ほし組さん、ケーキ屋さんしてた!」と周りの友達に話し、数人で5歳児の保育室に遊びに行くようになった。5歳児がしているケーキ屋さんの遊びの中で、5歳児に教えてもらいながら、お店の人になったりお客さんになってケーキを買ったりして楽しむようになった。そこで保育者は、ケーキづくりができる素材を用意し、自分たちでもケーキをつくれるコーナーを準備した。自分たちでもケーキづくりをはじめ、できたケーキをトレイやワゴンに載せていった。ケーキが載ったワゴンを5歳児の保育室まで持って行き、「ケーキ屋さんです。ケーキありますよ。いらっしゃいませ」と、ケーキを売りに行き、自分たちのケーキ屋さんを開き、互いのケーキ屋さんを行き来して楽しんでいた。



(反省・評価)

5歳児はケーキ屋さんに必要なもの(ケーキ・看板・レジなど)を考え、より本物らしくするために、友達とアイデアを出し合いながら、遊びを進めていった。保育者はそのイメージに合う

材料を用意したり、子どもと一緒に探したりすることで、遊びがどんどん広がり夢中に遊ぶことができた。しかし、クラスだけでは人数が少なく遊びが長続きしなかったので、4歳児を遊びに誘うことで、さらに遊びが盛り上がることで、一緒に遊ぶ中で、お店屋さんの遊び方を教えたり一緒にケーキを買って食べることを楽しんだり年下の友達に親しみや思いやりの気持ちを持つことができた。

4歳児は5歳児のしていることに興味を持ち、5歳児のケーキ屋さんの遊びが楽しかったことで、自分たちもケーキ屋さんをやってみたい気持ちが高まった。保育者が4歳児もケーキづくりができる場を用意したことで、「ケーキ屋さんをやってみたい」気持ちを実現することができ、満足感を得ることができた。5歳児に教えてもらいながらやりとりをしたことが、4歳児の中で遊びのイメージを共有することにつながった。互いにお店を開いたことで、4・5歳児の行き来も見られ、異年齢のかかわりが深まるきっかけにもなった。

5. 研究の成果

やり遂げる子どもにつながる姿や経験を次のように捉えた。

4歳児では、自分たちの「やってみたい」という思いが実現できたことで、満足感を味わったり、興味が広がったりし、次の遊びへの意欲が高まっていく姿である。

5歳児では、うまくいかないことも経験し、自分なりに考えたり工夫したりし、繰り返し挑戦する姿、友達と一緒に考えたり周りの友達の姿に刺激を受けたりしながら力を合わせたりすることで「できた」を感じる。その中で満足感や達成感を味わい、友達と共通の目的を持ち、自分たちで遊びを展開していこうとする姿である。

環境の工夫としては「やってみたい」と思える環境づくりとともに、子どもたちが疑問に思ったことや不思議に思ったことを考えたり試したりできる十分な時間と機会の確保が必要である。

保育者の役割としては、子どもの興味、関心、心の動きを丁寧に読み取ることが求められる。4歳児では、子どもたちが感じている疑問やおもしろさなどの気持ちに寄り添い、共に探究していくかかわりが必要である。5歳児では、子どもの行動を言葉にして意識できるようにしたり、自分や友達と一緒に考えて取り組んだりできるような助言者としてのかかわりが必要である。

「やり遂げた」結果を求めるのではなく、やり遂げようとする姿につながる様々な経験を積み重ねていくことができるよう、保育者は子どもの気持ちに寄り添い、環境を構成していくことが必要であることを再確認した。

6. 今後の課題

子どもが夢中になって遊びに取り組んでいる姿は多くある。保育者はそれを見逃さず、一人一人が満足感や達成感を得られるかかわりをしていくことが大切である。子どもが感じた満足感や達成感を一つの出来事で終わらせるのではなく、さらに遊びこんだり、長期間夢中になったりしている姿を追うことで、今後も、発達の過程に応じた環境の工夫や、保育者の役割、援助の在り方を追究していきたい。